上顎洞X線片側性陰影症例の統計学的検討

幸田 純治・中村 克彦

谷口 雅彦・松浦健次郎

Clinical Observation of the Unilateral Shadow of
the Maxillary Sinus

—A 5-Year Survey—

Junji Kohda, Katsuhiko Nakamura,
Masahiko Taniguchi and Kenjiro Matsuura
(The University of Tokushima School of Medicine)

One hundred and seventy-six patients with unilateral maxillary sinus X-ray shadow during a 5-year period were clinically investigated. Of the 24 malignant cases, we found many complaints, such as buccal swelling and orbital complications; chronic sinusitis was also found frequently.

Key words: unilateral shadow, maxillary sinus, clinically investigation

はじめに

副鼻腔X線像にて、上顎洞片側性陰影を呈する疾患には、歯性上顎洞炎などの良性疾患の他に、上顎洞癌などの悪性腫瘍が含まれており、日常臨床上注意が必要である。

これらはときに鑑別が困難であり、上顎洞試験開洞を要する症例にしばしば遭遇する。しかし、片側性陰影を呈する症例の中に悪性腫瘍の占める割合については、いまだ十分な検討がなされていない。

そこで、今回著者らは、最近5年間に経験した上顎洞片側性陰影症例176例につき臨床統計学的検討を試みたので報告する。

対 象

対象は、昭和57年より昭和61年までの5年間

に徳島大学耳鼻咽喉科外来を初診し、X線上、上顎洞に明らかな陰影を認めた患者2443例中、陰影の左右差を認めた症例209例のうち、経過観察の出来た症例176例である。

尚、術後性頬部嚢腫及び、治療後の悪性腫瘍は、対象外とした。

上顎洞片側性陰影の診断基準は、1965年文部省総合研究班の判定基準に従い副鼻腔単純X線写真にて、病変の程度を(－)から(±)、(1＋)、(2＋)、(3＋)の5段階に分類し、2段階以上の左右差を認めるものとしたが、副鼻腔断層撮影、CTも参考にした。

臨床統計的観察について

1) 疾患の内訳

全症例176例のうち上顎洞を開洞した症例は

84例48%であり、他の92例は鼻内手術、上顎洞穿刺洗浄、抗生剤投与などにより症状が改善し良性疾患と診断したため開洞術は施行していないが、悪性腫瘍は全例開洞している。

良性疾患では、慢性副鼻腔炎が、120例と最も多数であるが、この内、上顎洞を開洞したものは44例、36%である。その他に歯性上顎洞炎13例、真菌症5例、急性副鼻腔炎5例、原発性頬部嚢胞3例、乳頭腫2例、血瘤腫1例、鼻腔内線維腫1例をみとめた。

このうち明らかな男女差を認めたものは、真菌症であり5例すべてが女性であった(表1)。

悪性腫瘍は26例であり、全体の15%を占めているが、良性疾患も含め開洞した全症例84例中では悪性腫瘍は31%を占めた。

上顎洞癌18例中16例は男性であり、男女比は8:1と圧倒的に男性が多くなった。

また、上顎洞癌18例にJICのTMN分類を当てはめると、T1-0例、T2-3例、T

3-6例、T4-9例とstageの進行した症例が多く、病理組織型では、squamous cell carcinoma 17例、anaplastic carcinoma 1例であった。

その他の悪性腫瘍として認めたものは、横紋筋肉腫2例、悪性リンパ腫2例、篩骨洞癌1例、鼻中隔癌1例、歯肉部癌1例、Malignant fibrous histiocytoma 1例などであった(表2)。

2) 年齢分布の検討

症例全体の平均年齢は44才、慢性副鼻腔炎の平均年齢は39才となったが、悪性腫瘍の平均年齢は61才で、上顎癌に限ってみると69才だった。悪性腫瘍は高齢に多発する傾向が有り、図1のように加齢とともに増加し60才台でピークを示した。しかし、肉腫では、横紋筋肉腫の19才など、若年者にも発生していた。

3) 年度別症例数の検討

各年度の症例数を図2に、片側性疾患全数と悪性腫瘍につき示した。各年度で大きな差は認

表1 良性疾患

	男	女	計
慢性副鼻腔炎	52	68	120
歯性上顎洞炎	6	7	13
真菌症	0	5	5
急性副鼻腔炎	3	2	5
頬部嚢胞	2	1	3
乳頭腫	2	0	2
血瘤腫	0	1	1
鼻腔内線維腫	1	0	1
合計	66	84	150

表2 悪性腫瘍

	男	女	計
上顎洞癌	16	2	18
横紋筋肉腫	0	2	2
悪性リンパ腫	1	1	2
篩骨洞癌	1	0	1
鼻中隔癌	1	0	1
歯肉部癌	1	0	1
Malignant fibrous histiocytoma	0	1	1
合計	20	6	26

めなかった。

4) 主訴の検討

来院時の主訴には, 慢性副鼻腔炎では, 鼻閉が最も多く次いで鼻漏, 後鼻漏, 鼻出血であったが, 悪性腫瘍では, 頬部腫脹が最も多く, 鼻閉, 視器症状(複視, 眼球突出, 視力障害, 流涙など), 鼻出血の順となった。

5) 症状の検討

鼻症状では, 後鼻漏が, 悪性腫瘍に比し慢性副鼻腔炎に多く認められたが, 鼻閉, 鼻漏は, 悪性腫瘍でも高率に認められた。

逆に, 一側性鼻閉, 鼻出血, 頬部痛, 頬部腫脹, 視器症状, 歯痛などは, 悪性腫瘍で多く認められた(図3)。

6) 鼻内所見の検討

次に, 鼻内所見につき検討を加えた。患側の中鼻道が閉鎖していたものは, 129例, 72%であり, 逆に健側が閉鎖していたものは, 92例,

52%であった。これを症例別にみると, 慢性副鼻腔炎では患側が閉鎖していたものは71%, 健側が閉鎖していたものは55%であり, 悪性腫瘍では患側が閉鎖していたものは83%, 健側が閉鎖していたものは61%と大きな差は認めなかった。

明らかな鼻中隔彎曲を認めたものは51例あったが, 鼻中隔の彎曲により狭くなった側が患側であったものは, 27例, 52%で, 有意の差は認めなかった。これは, 鼻中隔彎曲による反対側の下鼻甲介の代償性肥大が影響しているためと考えられる。

鼻内に腫瘍を思わせる腫瘍を認めたものは, 15例, 9%有ったが, この内の2例は慢性副鼻腔炎による肉芽であった。

6) X線所見の検討

上顎洞と篩骨洞の陰影を文部省総合研究班の判定基準に従い(一)から(3+)の5段階に分類し, それぞれに0から4点と点数を与え, その平均を患側, 健側で比較してみた(表3)。

これによると, 慢性副鼻腔炎に比し上顎癌など悪性疾患では陰影が濃い傾向にあった。平均年齢の差を除くため, 40才以上の慢性副鼻腔炎と比較してもこの差は同じであった。

図1 各症例における年齢分布

図2 各年度における症例数

これは悪性疾患の症例に stage の進んだものが多いためとも考えられるが、健側も濃い陰影を示している事を考えると、鼻副鼻腔の慢性炎症が腫瘍発生の誘因となっていると考えるべきと思われた。

X線上骨欠損を認めたものは、25例、14%であり、そのうち悪性疾患は19例、良性疾患では頬部嚢腫、血瘤腫、歯性上顎洞炎の計4例であった。慢性副鼻腔炎には、一例も骨欠損を認めなかった(表4)。

考 察

片側性の病変を来した割合と悪性腫瘍の割合

表 3

	上顎洞		篩骨洞	
	患側	健側	患側	健側
副鼻腔炎 (120例)	2.88	0.67	1.00	0.62
40才以上の 副鼻腔炎 (62例)	2.87	0.77	1.06	0.74
上顎癌 (18例)	3.78	1.28	2.28	1.22
悪性腫瘍 (26例)	3.58	1.42	2.27	1.35

について、石井ら¹⁾は鼻副鼻腔疾患患者のうち片側性的上顎洞陰影を示した症例は8.4%でこの片側性疾患の7.4%に上顎洞癌を認め、確定診断のため試験開洞を施行した100例の片側性副鼻腔疾患の中では悪性腫瘍は62例であったと述べている。又、坂本ら²⁾は、片側性副鼻腔炎症状を呈した症例45例のうち、上顎洞癌3例前

表 4 X線所見上骨欠損を認めたもの

<良性疾患>	
頬部嚢胞	2例
血瘤腫	1例
歯性上顎洞炎	1例
計	4例
<悪性腫瘍>	
上顎癌	17例
横紋筋肉腫	1例
鼻中隔癌	1例
計	19例

図 3 各疾患における症状の発現頻度

頭洞癌 1 例と約10%に悪性腫瘍を認めたと報告している。内田³⁾は、鼻副鼻腔疾患患者のうち両慢性副鼻腔炎は39.2%片側性副鼻腔炎は2.4%であった、すなわち慢性副鼻腔炎のうち5.8%が片側性であったと報告している。

今回の著者らの集計では、副鼻腔疾患2443例中片側性副鼻腔疾患は drop out を含めると208例、8.5%で、この片側性疾患のうち悪性腫瘍は26例、15%であった。又、試験開洞施行84例中では悪性疾患は26例、約31%であった。

すなわち、報告者により集計の方法は異なるが副鼻腔疾患のうち片側性上顎洞病変は5～8%、その片側性病変のうち悪性腫瘍は7～15%程度であるということがいえると思われる。

上顎癌に慢性副鼻腔炎が合併する確率を酒井ら⁴⁾は約80%、石井ら⁵⁾は約44%、内田³⁾は約52%と報告しているが、著者らの結果では、56%となった。これらの値より程度の差はあるものの上顎癌に慢性副鼻腔炎の合併率が高いと言え、上顎癌と慢性副鼻腔炎の関連は否定できないと思われた。

上顎癌の男女比は1.5:1前後で男性に多いとの報告⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾が殆んどであるが、著者らの集計では8:1と諸家の報告と食い違いを生じた。

一方、真菌症に関しては経験した5例すべてが女性であり平均年齢は50才と、中高年の女性に多いというこれまでの報告⁹⁾¹⁰⁾と一致した。

悪性を疑う症状として頬部腫脹、片側性鼻閉、片側性持続性鼻出血、眼症状などが一般的に言われているが、今回の集計もそれを裏づける結果となった。しかし、頬部腫脹、眼症状などは、stage の進行していることを意味しており治療成績を上げるためには、それ以前の早期診断が大切であると思われた。

ま と め

1. 上顎洞片側性陰影を呈した症例176例につき検討を加えた。

2. 176例中、悪性疾患は26例、15%であっ

た。

3. 悪性疾患には、頬部腫脹、鼻出血、一側性鼻閉、眼症状などの症状が、良性疾患に比し高率にみられた。

稿を終えるにあたり、御校閲をいただいた小池靖夫教授に深謝致します。

なお、本論文の要旨は第12回日耳鼻中国四国地方部会学術講演会において発表した。

参考文献

- 1) 石井正則, 山口展正, 内田 豊, 他: 上顎洞試験開洞を要した片側性副鼻腔疾患 (100例) の検討と試験開洞の意義について. 耳展 27: 488～492, 1984.
- 2) 坂本 裕, 他: 片側性副鼻腔炎症状を呈した例の検討. 日耳鼻 83: 1215～1216, 1980.
- 3) 内田 豊: 片側性副鼻腔疾患の病態. 日本鼻副鼻腔学会会誌 20: 14, 1981.
- 4) 酒井俊一, 他: 上顎癌と慢性副鼻腔炎との相関. 耳鼻臨床 61: 927～931, 1968.
- 5) 石井正則: 上顎洞134例の臨床的検討. 耳展 27: 407～423, 1984.
- 6) 奥田兼三, 杉山正夫, 久我隆一, 他: 過去10年間の当教室における上顎悪性腫瘍の統計的観察. 耳鼻臨床 61: 441～447, 1968.
- 7) 大谷 厳, 服部正夫, 石田弘子, 他: 過去10年間のわが教室における上顎悪性腫瘍の統計的観察. 耳展 42: 145～150, 1970.
- 8) 山際幹和, 三吉康郎, 他: 鼻・副鼻腔悪性腫瘍の臨床的観察—当教室20年の集計—. 日耳鼻 79: 1347～1356, 1976.
- 9) 真崎正美, 内田 豊, 他: 副鼻腔アスペルギルス症—自験11症例及び本邦報告例からの検討. 耳展 24: 138～143, 1982.
- 10) 榎本和子, 他: 副鼻腔真菌症の9例. 耳展 27: 493～497, 1984.

別刷請求先: 幸田純治
(〒770 徳島県徳島市蔵本町3
徳島大学医学部耳鼻咽喉科学教室)